国際交流基金助成事業報告書

薬学部　6年次生　橋本由李

１．はじめに

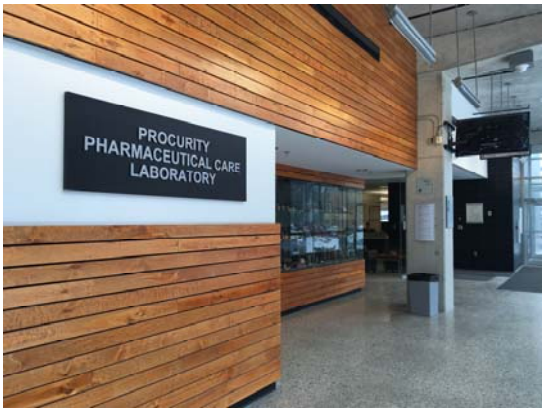
この度、神戸薬科大学の岩川精吾教授のご紹介により、カナダのマニトバ大学にて、IPE(Inter Professional Education:専門職連携教育)ならびに、IPW(Inter Professional Work:専門職連携)を勉強する機会をいただいた。
IPE や IPW は、我が国においても、現在、それらの必要性が叫ばれており、各大学や医療機関にて様々な取り組みがなされている。
カナダにおいて、その歴史は日本よりも長く、現在では大学での教育に普遍的に取り入れられている。
今回は、カナダのマニトバ大学における IPE のカリキュラムに携わる先生方に、予め組んでいただいた三日間のスケジュールのもと、IPE をご教授いただいた。

２．マニトバ大学の概要

マニトバ大学は、カナダのマニトバ州ウィニペグに存在する。ウィニペグはカナダにおいて最も気温の低い冬が訪れる地域であり、１年で最も寒い１月はおおよそ−30℃、最も寒いときは−50℃まで気温が下がるのだという。

マニトバ大学の医療系学部には、医学部、歯学ならびに歯科衛生学部、薬学部、看護学部、リハビリテーション学部の５つの学部があり、その全学生が IPE を学ぶ。薬学部は４年制であり、１年次より他学部と合同のグループワークなどを経験し、他職種の中における薬剤師のあり方を勉強している。

（写真 1）マニトバ大学バナタインキャンパス内の Apotex Centre(薬学部棟)の外観



（写真 2）Apotex Centre の１階

３．施設見学

マニトバ大学の医療系学部のキャンパス内や、大学に併設、または隣接する薬局、

呼吸器のクリニック、実習施設、ペインクリニック、多発性硬化症のクリニック、プライマリケアクリニックを見学した。

薬局では、いくつかあるカウンターに「flu shot」と書かれたポスターが貼ってあり、薬剤師によりインフルエンザワクチンを啓蒙していた。マニトバ州では、ここ数年の間に、薬剤師による注射の実地が開始し、薬学部の学生も3年次に実習をしている。このことは、マニトバ州の薬学業界においても大きな話題であるようで、お会いする何人もの先生方が、薬剤師による注射についてお話してくださった。

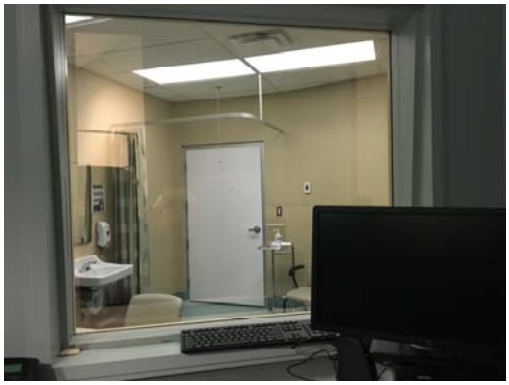
呼吸器のクリニックで印象的だったのは、カナダには、呼吸器科の専門医の他に、呼吸器専門のセラピストがいたことである。カナダでは徐々に浸透して来ている職種のようで、今まで薬剤師が行っていた吸入指導なども、このセラピストが行っている。

実習施設は、OSCEのような実習をする場所である。薬学生においては、1年次は5分間、3年次では8分間の実習試験があり、当施設で行う。試験室には、本物の医療機関のような設備が整えられており、実習用の人形も備えられていた。試験室と外をつなぐガラス張りの窓は試験室の内側から外側は見えず、鏡のようになっている。そのため、評価者は試験室の外から学生の評価を行う（写真3、4)。また、このとき、別の建物において、薬学生と看護学生が合同で注射の実習をしているところを、実習室の外から見学させていただいた。

ペインクリニックでは、施設見学の他、医師による問診の様子や、脊髄穿刺の手術の様子を見学した。問診を見学させていただいた患者の主訴は、「左腕から胸にかけて焼けるような痛みがある」というものであった。カナダでは、「family doctor」、すなわち日本でいう「かかりつけ医」のような制度があり、体調を崩すと、まずはそれぞれのfamily doctorを訪ねる。family doctorが、より精密な検査や、専門的な介入が必要と感じれば、紹介状を書く、という仕組みである。この患者も、family doctorによる紹介状によって、当院を訪ねたという経緯があった。今回、family doctorの業務を見学することは叶わなかったが、この患者の見学を通して、カナダにおける医療制度も学ぶことができた。

多発性硬化症を専門とするクリニックでは、ボトックスの注射を患者に打つところを見学し、また、プライマリケアクリニックでは、薬剤師の先生による抗血液凝固薬のプレゼンを拝聴したり、実習中の薬学生がインスリン製剤の使い方を教えてくれた。

（写真3）実習施設における試験室
奥の窓は鏡のようになっており、試験室内から評価者のいる外の様子は分からない。



（写真4）試験室を外から見た様子
評価者はここで学生の試験をモニターし、評価を行う。

４．ケーススタディへの参加

先に述べた呼吸器のクリニックにて、薬学生、看護学生、呼吸器専門職の学生によるケーススタディに参加させていただいた。COPD（慢性呼吸器疾患）の患者の病状や経過、服用薬などの情報を元に、薬の選択の是非やどのようなケアができるかなどをディスカッションした。

この時は、一方的に教えてもらうだけでなく、学部の違う学生と、一人の患者について考察し、また日本の現状なども話すことができ、カナダの学生とも交流を図ることができ、貴重な体験をさせていただいた。

前章で述べた、インスリン製剤の使い方を教えてくれた薬学生然り、ケーススタディのメンバーであった学生然りなのだが、実務的なことを熟知しており、とても刺激を受けた。例えば、今回のケーススタディにおいて、薬学生が、「ガイドライン上では」と一言言った上で意見したり、呼吸器専門のセラピストの学生は、様々な吸入器の使い方を、実物を使って教えてくれたりした。

薬学的なことを理解するにはまず薬とその効果を覚えなければならないが、カナダの学生は、実習や実務的なことまで含めた勉強を 4 年間の学生生活の間にこなすのだから、相当な努力が必要であろうと感じた。

５．最後に

今回は、3 日間という短い期間ではあったが、IPE や IPW を体験し、また薬剤師や薬学生の活躍を目の当たりにし、毎日、とても刺激的であった。見学させていただいたクリニックには、医師や看護師、薬剤師、リハビリ関連の職種、ソーシャルワーカーが常駐しており、その連携の仕方を学んだことから、IPE、IPW の大切さを改めて感じた。

また、英語でのケーススタディに参加したことは、IPE を経験したということももちろんだが、初対面で言葉が通じない相手にどのように意見を伝える方法を学んだという点でも、大きな意味のある経験であった。

現在、我が国では、2025 年に向けて地域包括ケアシステムの構築が進められているが、このシステムにおいて必要とされる医療・介護施設には、同じ施設内に他職種が存在することが難しい場合もある。このような現状をふまえた上で、この貴重な経験を、自分自身の薬剤師としてのキャリアに活かし、また、薬学業界の発展に還元できるよう、努めたいと思う。

謝辞

このたび、このような機会を与えてくださいました、神戸薬科大学の岩川精吾教授、訪問を快く受け入れてくださったマニトバ大学の Ruby Grymonpre 教授、Shyama Nanayakkara 先生はじめマニトバ大学関係者の皆様、見学にご協力いただきました患者の方々、そして、多くのアドバイスをいただきました、本学の天野富美夫教授に深く感謝申し上げます。